

シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第45回) 社会に連動した産学連携モデルを創る

上席イノベーションコーディネータ わたり こうじ
渡利 広司

コーディネーションとの出会い

産総研発足当時、セラミックスの低環境負荷プロセスの開発を目的としたグループの長に任ぜられました。産業界の要請に応じて立ち上げた新規のグループのため、研究リソースというものはほとんどなく、研究室作り、人材の獲得、研究開発プロジェクトの提案など、ゼロからの出発でしたが、研究の進捗と共に日々グループの成長を強く感じ、とても充実した期間でした。この時、研究テーマの設定、モチベーションの与え方など、研究リーダーとして貴重な経験を積みました。また、産業界との接点の場の作り方、優秀な人材の集め方、活かし方と接し方、研究成果のアピール方法など、研究を進める環境の整備（コーディネーション活動）の重要性を感じました。



プロジェクトのなかで、企業との共同研究は予想以上に進捗し、得られた成果はセラミックスの省エネプロセスとして製造ラインに導入されました。この企業との研究は産総研を代表するものとして高く評価されるとともに、セラミックス産業界に大きく貢献したグループに与えられる賞を受賞しました。一方で、共同研究の成果を生かした企業の技術力の高さに、深く敬服しました。（成果の一部は産総研が発行する学術誌 *Synthesiology*, Vol.2, 137-46 (2009) に報告）

産総研を内から外から見る

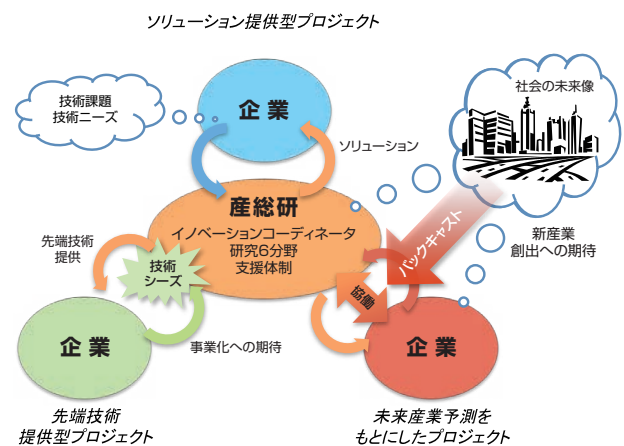
最近5年間はイノベーション推進本部に配属された後、企業の研究所に出向し、産総研全体を内と外から継続的に見る機会を得ました。イノベーション推進本部では、イノベーションを創出するための産総研の看板プロジェクト、オープンラボなどのオペレーション、研究戦略の策定などを担当しました。また、企業では、将来事業の探索、国研や大学の有望技術シーズの調査とニーズとのマッチングなどを担当しました。この時、研究開始前のシナリオ作り、研究終了後の筋の良い技術への育成、市場への出口作りなどの重要性を感じるとともに、産総研の研究と連携の弱点を私なりに理解できました。

この期間は、“科学と技術”の社会への貢献のあり方を考えさせられた時期でもありました。数多くの技術シーズ、優秀な人材、資金力、整備されたインフラ、国からの研究投資

など素晴らしい研究環境がありながら、多くのプロジェクト成果は事業化できずに埋没してしまいます。一方で、東工大の細野教授のIGZO、京大の山中教授のiPS細胞など日本発の先端技術の成果が、迅速に企業の主力事業に生かされつつあります。これらの研究成果を生み出したこと自体もちろん凄いのですが、成果を産業界に繋げる連動体制（知財戦略、成果普及など）も併せて強化していたと聞き、高いレベルのコーディネートの必要性を強く認識しました。

上席イノベーションコーディネータとしての役割

産総研が行った共同研究実績の多くは研究ユニットの成果がベースとなり、連携を積極的に推進した結果生まれたものです。一方で、企業が抱える問題に取り組むソリューション提供型の共同研究は少ないのが現状です。また、最近の動きとして、産総研への来訪者は企業の研究開発担当者に加え、企画戦略部門やマーケティング部門の方が急激に増えています。その結果、企業の中期事業計画、技術開発計画、社会の未来像を意識したプロジェクトの策定などに産総研の研究成果が活用されるようになってきていると強く感じます。私は、このような新しい動きを敏感に察知し、産業界の皆さまからご意見をいただきながら、社会の中での産総研の新しい機能を創っていきたいと思います。同時に、新たな価値を創り出す、創造的な役割、そして社会変化に応じた成果を最適なかたちで社会に発信できるコーディネータを目指しますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



産業界からの要望に応える研究開発プロジェクトの推進